

寮自治とは寮での民主主義の実践です。

駒場寮では寮生が寮自治によって寮を運営しています。

前回までのあらすじ

駒場寮は、「教育の機会均等」を保障する学寮として、学生の負担にも耐え得る安価にて住環境を提供してきました。これは、東大が、東京という物価・地価の高い地域に在る以上は、苦学生が教育を受けるための経済面での障碍を低くする学寮が必要不可欠だからです。教養学部当局が駒場寮の代替施設であると主張する三鷹宿舎は、最低限必要とされる金銭的負担が駒場寮の3倍以上にもなることや、学生による寮運営＝寮自治による学生の視点からのflexibleな対応ができないことなど、駒場寮の代替施設とはなり得ていません。

自治とは、民主主義の実践のこと

駒場寮には寮自治があり、大学には大学の自治があります。大学の外を見ても、都道府県や市町村などは地方自治体と総称されているし、日本も主権在民という名で表される自治団体です。このように近・現代社会では、大抵の組織は構成員自身もしくは構成員の代表を通じた自治によって運営されていることは、皆さんご承知の通りであると思います。構成員個々人の主体的な意見が、組織の運営に大きく、そして正しい形で、(即ち民主的に)反映される自治という仕組み、これが円滑に機能することによってのみ、理想的な民主主義が実現すると言っても言い過ぎではないでしょう。

駒場寮における寮自治

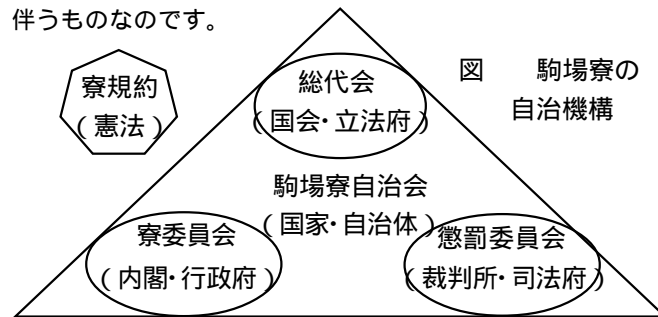
さて、それでは、駒場寮における寮自治は、実際にどのように行われているのでしょうか。

駒場寮では寮内の全てのことが寮生自身の手によって議論され、決定され、実行されています。このような寮自治は、一高時代の全寮制自治に流れを甞し、その後の長期に渡る自

治の慣行に基づいて確立されてきたものです。その中で作られてきた寮規約と寮規定が、これまでの駒場寮の運営の基本的な枠組みを形成してきました。特に、寮規約は寮の憲法に相当するものとして、寮自治の根本としての役割を果たしています。

その他にも寮自治を実質的に確立する二つの権利として、入退寮選考権と財政管理権があります。入退寮選考権は、個々の学生の経済状況を考慮して必要に応じて入寮許可を与えることや、今後の寮自治の健全なる担い手を自分達で作りに上げていくために、無くてはならない権利です。また、財政管理権は寮運営の根幹を占めるお金の問題であることから、自治による寮運営を行っていく上で、この権利が無くてはならないことは言うまでもありません。

これらの権利に裏打ちされた寮の運営は多岐に渡るため、寮生にかかる負担も時に軽いものではない場合もありますが、各寮生の十分な自治意識なしにしっかりした寮運営は成立し得ません。自治を掲げる我々は、自由度の高い運営を行うことができますが、それは同時に極めて大きな責任を伴うものなのです。



寮自治を支える機構

寮生の総体 = 寮自治会を代表する、寮の最高決議機関と

して存在するのが、総代会です。駒場寮の総代会は間接民主制を取っており、各部屋から一人ずつ選ばれた総代が各一票の議決権を持って決議に与ります。総代会は寮の最高決議機関ですから、総代会の決定に従って、寮委員会やその他の組織が活動することになります。

駒場寮を国家に例えるならば、国会に当たるものが総代会であり、内閣に相当するのが寮委員会です。寮委員会は駒場寮の執行機関として、全寮生の直接投票で選ばれた寮委員長の下に組織され、寮全体に関わる問題について集中的な議論を行う場となります。寮委員会内には、広報を担当する部局や部屋の管理をする部局など、いくつかの部局が設けられており、分業による効率的な運営が図られています。

この他に、裁判所に当たる懲罰委員会、会計監査を行う監査委員会、夏・秋などの寮祭を切り盛りする寮祭実行委員会、新入寮生の募集を引っ張るオリエンテーション実行委員会など、いろいろな委員会があります。

このように、駒場寮の自治は、少なくとも制度の面に於いては、これまで長い間掛けて積み重ねられた経験のもと、非常に完成度の高いものとなっています。もちろん、足りない部分は今後の修正が必要なわけですが、このように完成度の高い自治機能を持った駒場寮を安易に潰すことが、今後の大学自治・学生自治にとって大きな痛手となることは目に見えていると思います。冒頭で述べたとおり、いまや自治 = 民主主義はあらゆる組織で取り入れられています。このような制度を、なぜ学生寮からは無くそうとするのか(三鷹宿舎の自治は非常に限定されています)。自治 = 民主主義を守り実践してゆく場として、駒場寮の意義がまた一つ明らかになったことと思います。(次号もよろしく) 1999.10.28

駒場寮委員会

駒場寮「廃寮」の不当性シリーズビラ

駒場寮委員会(裏面もご覧ください)

反対を踏み潰す学部当局の不当性

前回のシリーズビラでは、駒場寮問題は教養学部当局が学生・寮生との合意無、一方的に駒場寮の「廃寮決定」を行い、それを押しつけてきたことに端を発していることについて解説しました。その決定過程において重大な問題があった、不当な駒場寮「廃寮」を強行するための様々な形で学部当局の「不当」上塗り、まさにここから始まっています。駒場寮委員会では、駒場寮「廃寮」の不当性について皆さんによく理解してもらったため、ビラを全4回にシリーズ化して作成しました。シリーズ二回目である今回のビラでは、「廃寮決定」後の学生無視・強硬の押しつけについて、できるだけわかりやすく説明していこうと思います。

学生・寮生は一度も、駒場寮「廃寮」に賛成していない

臨時教授会決定(91年10月)後、学生側から反対の声があがる中、それらに耳を傾けることなく、教授会「決定」からわずか三ヶ月後(92年3月)に、学部当局は「廃寮」計画の強行を宣言しました。これ以降、学部当局は、なんとしても駒場寮潰しをやり遂げようと、反対意見を無視するばかりか、学生の意見を意図的に曲解して、それを駒場寮「廃寮」の根拠としてきました。

駒場寮「廃寮」決定後の最初の学生側の意思表示は、91年11月の駒場寮総代会(駒場寮の最高意志決定機関)決議、続いて学生自治会代議員大会決議でした。駒場寮総代会では「駒場寮廃寮を前提としないこと」を、また代議員大会では「抱き合わせ廃寮に反対」「学内議論のための三鷹計画の一年凍結」を可決したのです。いずれも当事者との議論抜きでなし崩し的に「三鷹計画」の条件として駒場寮を「廃寮」とすることに反対する点で一致しています。また、93年には駒場寮存続を求める署名2500筆が集まり、「廃寮」反対ストライキ、駒場寮の存続を求め「加藤登紀子コンサート」なども行われました。以降も署名や代議員大会決議を始め、学生側は繰り返し「廃寮」反対の声をあげてきました。

その一方で、学部当局はしきりに、学生は駒場寮の「廃寮」に賛成した、と言います。その根拠として、91年12月の「無作為抽出アンケート」がありますが、これは「こんなすばらしい学生宿舎ができたなら入りたいか」というように、三鷹宿舎の(よい点の)宣伝がほとんどで、駒場寮の「廃寮」計画について正面から尋ねたものではありませんでした。また、学生の声であった「三鷹宿舎建設」「駒場寮「廃寮」反対」を意図的に曲解して、「駒場寮「廃寮」は三鷹計画とは切り離せないから、学生の意見は「廃寮」賛成である」とし、学部当局は駒場寮「廃寮」の有力な根拠であるかのような言い方をしますが、学生の意見は駒場寮「廃寮」と三鷹計画とのリンクに反対するものです。加えて、この時点ですでに三鷹計画が予算化されており、学生の意見が計画に何らの影響も与えた訳ではないのです。ここには、利用できるものは利用してしまえという、学部当局の卑劣な態度が浮き彫りになっています。実際、94年の交渉では「学生の意志は一貫して廃寮反対である」と、学部当局が認めています。結局、同じ交渉の場で、「学生の意志は重く受け止めるがそれよりも計画の方が遙かに重い」という発言にも見られる通り、学生自治を半ば否定する形で計画最優先の立場を堅持して行われているのが、駒場寮「廃寮」計画に他ならないのです。

反対 踏み潰し

既成事実化 策動す 学部当局

学部当局は「廃寮」反対の世論の高まりをおそれてか、駒場寮「廃寮」の「ムード作り」を画策してきます。反対の声が強くて、「駒場寮跡地」についての計画を学生に宣伝し、「廃寮」既成事実化を進めることにより、学生の間に「あきらめ」の雰囲気を作り上げようとしたのです。しかし、そこで明らかになったのは、「キャンパスの有効利用」など何一つ計画されておらず、「150億円(うち60億円は募金)集めたらこんなものが作れる」という、ただの机上の空論にすぎませんでした。駒場寮「廃寮」計画の杜撰さが、ここでも露呈したのです。しかし、学部当局は更に既成事実化を進めるため、92年10月に三鷹宿舎の着工を強行します。今、交渉で学部当局は「三鷹宿舎ができてしまったから「廃寮」は撤回できない」と主張します。しかし、「学生の意志は一貫して廃寮反対である」と学部当局も認めるとおり、「駒場寮廃寮のための三鷹建設」に学生が合意したことは一度もない訳ですから、このような主張は単なる話し合い拒否、既成事実化に過ぎず、全く認められないのです。

学部当局 言 交渉

学部当局はこれまで、学生側と数百回にも上る交渉を行ってきたと主張します。しかし、「交渉」の実態は、「廃寮」を既成事実化し、「駒場寮からいかにでていくか決める」というものでした。「死に方を選べ」というのは、交渉ではありません。交渉は双方が誠実に話し合い、意見を出し合う場なのです。このような話し合いをしようとしぬ態度を全く変えないまま、96年4月、学部当局は駒場寮の「廃寮」を宣言したのです。そして、ここから、なりふり構わぬ暴力的追い出し攻撃が始められるのです。

- 1991年10月 臨時教授会で、駒場寮「廃寮」決定
- 1991年12月 学部当局、「アンケート」開始
- 1992年2月 学部当局、計画強行を宣言
- 1992年7月 駒場寮「跡地計画」の「公開説明会」
- 1992年10月 「三鷹国際学生宿舎」着工
- 1993年2月 三鷹特別委員会交渉において、「署名等、学内世論が盛り上がりれば駒場寮は残る」
- 1993年7月 駒場寮存続を求める署名2500筆提出
- 1993年11月 学部当局、文書「創造的学園スペース『駒場CCCL』の創成に向けて」発行(CCCCL計画発表)
- 「廃寮」反対ストライキ
- 「駒場寮存続を考える」加藤登紀子コンサート
- 1994年7月 学部当局、カラーパンフ「CENTER FOR CREATIVE CAMPUS LIFE 駒場」発行
- 1994年12月 「の寮募集停止」と連帯ストライキ
- 1995年1月 「入寮募集停止」反対の全国集会
- 1995年4月 学部当局、「入寮募集停止」を宣言
- 1995年12月 全学投票で、「寮存続または学内寮建設」が批准される
- 1996年4月 学部当局、「廃寮」を宣言